

ラトナーカラ・シャーンティと竜樹

海 野 孝 憲

「問題の所在」

ラトナーカラが継承した学問的系統について、彼が唯識説を立場とする、密教系の学者であったことについては異論はないが、彼の、唯識系内部での位置付けについて、彼を中観系のシャーンタラクシタやカマラシーラの系統に連なる「中観瑜伽派」を代表する学者の一人として、「経量瑜伽派の理論を批判し、中観と唯識を統一した理論を展開した者¹⁾」とする説が通説化している。しかしこのような「中観と唯識を統一した理論」とは、ラトナーカラの、どのような思想に基いて主張されているのか、更にそのような両派を統一した理論を認めるとしても、彼の論書の多くに執拗に繰り返えされている中観派批判と、どのような点で調和することが可能であろうか。上記の通説の信憑性も含めて考察する。

「問題解明への一つのアプローチ」

解明への糸口として、原点に帰って、ラトナーカラと、彼によって聖教量として用いられた中観派の始祖、竜樹との関連について、各種の資料によって検討し、更に、ラトナーカラと、竜樹と、ラトナーカラによって批判される中観派の三者の関係を考察する。聖教量として引用された竜樹の偈は PPU, MAU, MAV, SSB 等に引用された「中論」「六十頌如理論」等の諸偈²⁾である。これらは、必要に応じて、各種のテキストに重複して引用されたり、同一のテキストの中で、数回、反復して用いられている。資料は内容によって、次の四種に分類することができる。

各資料の内容要約

「資料A」の要約

竜樹は聖教量として、弥勒、無著と共に引用されている。しかし竜樹は中観派の始祖として、序列上、二人の下位に位置付けられている。

「資料B」の要約

竜樹は聖教量として、無著と等しき真理を証得した者とされているが、竜樹は初地の聖者であり、第三地の無著の下位に位置付けられている。

「資料C」の要約

竜樹は無著に等しき者として、瑜伽行派の教証として引用され、竜樹との思想上の一致は「瑜伽行派と中観派の実証された真理は等しい」という言葉で示される。しかし一方では、瑜伽行派と対峙する中観派は「竜樹の門弟ではない」という言葉で批判されており、中観派に対する対決姿勢も否定できない。この場合、竜樹は瑜伽行派の中に取り込まれていることに注意すべきである。

「資料D」の要約

竜樹はラトナーカラによって瑜伽行派の教証として引用されるばかりではなく、瑜伽行派の論書と同義または同列に扱われることもある。資料Dは次の二種に分類される。

- (1)、「中論」が「中辺分別論」と同義に引用されている例。
- (2)、「六十頌如理論」が「唯識三十頌」と同列に引用されている例。

「資料A」

1. 「弥勒、無著によって演説され、竜樹によって陳述された、聖教に依拠せる量によって、二諦を解説しよう。」 MAV (117-3ff.), MAU (223b-3ff.)
2. 「世尊、弥勒菩薩は出離するやいなや、等正覚となられ、聖無著は第三地である。竜樹であり、歓喜地を修して極楽に至ると説かれているからである。」 MAV (117b-7ff.)
3. 「『一切法は無自性等～である。』³⁾と説かれていることの意趣はまた、經典の意趣を解説して説かれているので確実である。そのことは実に弥勒と無著と竜樹によっても（同様である。）」 MAU (229b-5ff.)
4. 「經典によって、我々の側の者を教示することと、他の者を正しい意味に通達せしめんが為に、大乘の弥勒と無著と世親によって（中）道であるそのことが説かれた。」 MAV (131a-4ff.)

上記の資料により、次の二点が明らかにされた。第一は、竜樹について、瑜伽行派、中観派というセクトに基づく序列上の上下関係。第二は、聖教量としての三者の覚証した真理の平等性についてである。とりわけ、後者については、次の資料BのSSBは、無著と竜樹の両者の到達した真理の平等性を随所で強調している。

「資料B」

1. 「それ故に竜樹と無著の教えに従うことにより、聖教は量である。何故ならば、竜樹は初地に住する者であり、無著は章三地に住する者であり、覚証された真理も等しいものであるからである。」 SSB (291b-2ff.)
2. 「無著の、所縁に心を停止せんとする広大な方便は『瑜伽師地（論）』において、詳細に説かれているので、ここでは詳しく提示しない。竜樹によって説かれたように、了解しよう。」 SSB (319a-6ff.)
3. 「（所取、能取の）二つを離れた自証は実有であることは聖教と道理より明白であり、それ（自証）を無であると考えすることは損滅の極みであると、聖無著によって明らかに説かれており、聖竜樹もまた、『無見の者は悪趣へ行き、有見の者は善趣へ行く。如実に遍く知るならば、二つのものに依らず解脱する。』⁴⁾と云々と説き～」 SSB (246a-5ff.)
4. 「ここに竜樹と無著によって確立された道理を知らず、増上慢を有する者はこのように説く。」 SSB (295b-2ff.)

ところで、上記のSSBに見られるような無著と竜樹との思想上の平等性の主張は、所謂、「中観と唯識を統一した理論」を意味するものでは決してない。それは上述の資料の3に見られるように、ラトナーカラは竜樹を引用する際に、中観説の教証としてではなく、言わば、竜樹を瑜伽行派の中に取り込み、唯識説の教証として利用しているからである。この点は、次の資料Cの「六十頌如理論」第34偈の引用と、それに対するラトナーカラの解説の中に、更に如実に見ることができる。

「資料C」

1. 「竜樹もまた、～⁵⁾『大種等と言われるものは識において集合し、智において離散する時、虚妄に分別されたものではないか。』というこのことによって、すべては説かれている。それ故に瑜伽行派と中観派との実証された真理は等しい。それ故にこの意味は逸脱するのが困難である。」 MAU (226a-4ff.)
2. 「竜樹もまた、～『大種等と言われるものは～虚妄に分別されたものではないか。』というこのことによって、すべては説かれている。『大種等と言われるものは識に集まり、それ（識）の中に属する。外の大種等は存しないが、諸々の世人にはそれ（大種）として顕現する識が生ずるが、全く迷乱なき智によって、それは滅せられるから、『虚妄に分別されたもの』、即ち、迷乱の分別によってす

でに分別されているものである故に、虚妄であるというのが第二番目の句の意味である。これによって、瑜伽行派と中観派との実証された真理は等しい。以下の部分のみは異なる。諸々の瑜伽行派の者達は、世人によって考えられた諸法は虚偽であるから有ではないが、因果として確定しており、本来の自性である自証は迷乱を離れているので、顕現の自体は真実そのものであると言う。中観派の者は、（諸法が）因果として（確定したものとして）顕現することを自体とすることと、自証とは迷乱の相として（世俗としては）増益されたものではないが、実は（勝義には）顕現の自体は微塵も分別されないものであるので、有でもなく無でもないと言う。」 PPU (161b-8ff.)

3. 「このように、竜樹もまた、『大種等と言われるものは～虚妄に分別されたものではないか。』と説いている。このように、瑜伽行派は諸法の本来の自性である顕現のみが実有であることを認めるが、中観派はかの実（有）を認めず、この差別は名のみであると考え。それ故に、徒に、諸々の瑜伽行派の者達と諸々の中観派の者達とは共に論争し、人々の悪い鑑となっている。」 PPU (170a-1ff)

4. 「竜樹もまた、このように『大種等と言われるものは～虚妄に分別されたものではないか。』と説いている意味は以下のものである。『大種等』とは地等であり、世尊によって説かれているそれらのものが識すなわち虚妄分別において顕現することが和合すなわち『集合する』ことである。かの虚妄の自性によって、それは顕現するからである。それ故に、真実智を修習した力より生ずる『離散する』とは消滅し顕現しないことである。『虚妄に分別されたものではないか』とは、虚妄の知においては顕現するものは真実智においては（顕現）しない。ここに地等に『識において集合する』という句があるからである。そして真実智が生ずる時、迷乱は捨てられるという句があるからである。外⁶⁾の自らの色蘊は（有ると）認め、他の四蘊（受、想、行、識）が滅した相を迷乱が捨てられたことであると認める彼らは竜樹の門弟ではない。有なる知等（他の四蘊）は滅すると説くから、そして地等は（無であるのに、有であるとして）増益して説いているからである。更に、青色等と、それ（青色等）を知る知との二つは（各々）虚偽に似たものと、所依に似たものとであると説くそれらの者も竜樹の門弟ではない。」 MAV (128a-1ff.)

以上において引用された四種の資料は中観派に対する、次のような二面的態度を示している。

1). ラトナーカラは、資料1と2に於て、竜樹の偈を介して自説と竜樹との共通

性を、「それ故に瑜伽行派と中観派の実証された真理は等しい。」という語句で示し、竜樹との共通性によって、瑜伽行派と中観派との両派の共通性を主張している。

2). 更に、資料2と3に於ては、竜樹と自説との共通性は認めながら、自説と相異なる中観派を、瑜伽行派と相異なる中観派と捉え、更に資料4に於ては、一歩進んで、竜樹を自らの側に取り込むと共に、自説と相異なる中観派を「竜樹の門弟ではない」と批判している。換言すれば、ラトナーカラは中観派に対して、「瑜伽行派と中観派の実証された真理は等しい」といわれる中観派と、「竜樹の門弟ではない」として批判される中観派との二つを使い分ける二面的態度を示していることに注意すべきである。

それでは、ラトナーカラにとって、竜樹はいかなる存在であったであろうか。竜樹はラトナーカラによって、聖教量としては、瑜伽行派に対する中観派の始祖というセクトの差別により、序列上、弥勒、無著の下位におかれているが、SSBに見られるように、初地の聖者として、とりわけ、第三地の無著と等しき真理を証得したものとして両者の平等性が強調されている。それは「六十頌如理論」第34 偈引用の四つの資料に見られるように、瑜伽行派の庇護者としての竜樹を意味し、更に瑜伽行派に対峙する中観派を批判する際の有効な切り符としての竜樹に外ならない⁹。

次に、ラトナーカラが聖教量として、竜樹を引用する際に、竜樹にどのような位置付けを与えているかについて、検討する。

「資料D」

(1). 「中論」XXIV-18 が「中辺分別論」1-1 と同義に引用されている例。
「(ある一派の中観派⁸)に対して) もし勝義としては無であるが、世俗としては有であるというならば、それも正しくない。車の部分があるとき、車として仮設されるそのように、蘊が有である時、人を仮設する。一切のものが(勝義として) 無である時、何に依止し、何を仮設するのか⁸)。(第二派の中観派に対して) 一切のものが有でもなく無でもなく、中道であり、すべては無であるわけではないと我々は説くというならば、それもまた、不合理であり、有と無とは相互に他を排除することを一つの特性とするものであるので、一方を減することにより、第二のものが示されるから、(有と無の) 二つのものの減は不合理である。ここに竜樹の回答がある。『縁生であるそれは空性であると説く。それは縁⁹)によって施説

されたものであり、それは中道である。』¹⁰⁾あるものが依他性すなわち縁生である時、そのものにおいて分別性は無いので、どうして縁生のものにおいて損減がなされるか。かの施設された取蘊も縁生のものであり、虚妄分別（依他性）が存する時、それによって取蘊が仮設されるからであると考えられる。『縁生であるそれは中道である』とは次のように考えられる。分別性がすべて無である時、依他性は無ではない。それ故に中道であるという意味である。』MAV (120a-4ff.)

ここでは、依他性すなわち縁生の勝義有を主張することにより、それを認めない中観派に対して、ラトナーカラは、「中論」を引用し、それを瑜伽行派の三性説によって解説することによって、「中論」を教証とする中観派批判を展開している。MAV は、これに続いて、「中論」を「中辺分別論」1-1 と同義に解釈して、次のように、上の解説を補足している。

「それ故に（所取，能取の）二つのものは無であるのに顕現するから、それ故に虚妄分別はある。何故ならば、それ（虚妄分別）は有である故に、二つのものとしての空はそれにおいて有り、これは三法の自性として成立する。この分別性は有ではないが、依他性は無ではないということがこのことが中道であると確定している。」 MAV (120b-3ff.)

このように、ラトナーカラは、竜樹の「中論」XXIV-18 は明らかに瑜伽行派の教証であり、それは「中辺分別論」1-1 と同義に解釈されるものであった。これは MAV (137a-5ff) で、全く同様の中観派批判が「中辺分別論」1-1, 1-2 を教証として行なわれていることから明白である。

(2)。「六十頌如理論」第 34 偈が「唯識三十頌」第 1 偈、第 2 偈と同列に引用されている例。

資料 C の 4 に於て、ラトナーカラは「六十頌如理論」第 34 偈を引用し、二派の中観派を批判する際に、それぞれの対論者に対して、「竜樹の門弟ではない。」と述べたように、竜樹はラトナーカラにとって、中観派批判の有効な切り符として用いられた。次に述べる SSB 引用の「六十頌如理論」第 34 偈は「唯識三十頌」第 1 偈、第 2 偈と同列に引用されており、あたかも瑜伽行派の論書のように見なされている。

「諸々の顕現したものは、心を離れた外境が存しない（ので、それは心に外ならない。）それ故に、聖（竜樹）は『大種等と言われるものは識に於て集合し、智に於てそれが離散する時、虚妄に分別に分別されたものではないか。』と説き、聖弥勒¹¹⁾も又『実に、種々なる我と法との仮設が行われるとしても、それは識の

転変である。』『異熟と思量と境の了別とである』と『(唯識) 三十頌』の中で述べており～」 SSB (288b-5ff.)

「結 論」

以上の考察によって、我々はラトナーカラ・シャーンティと竜樹との関連を次のように、要約することができる。

1. ラトナーカラにとって、竜樹は、弥勒、無著の二人に対して、第三位に位置する聖者であり、中観派の始祖ではあるが無著との思想上の同一性が強調されている。
2. 従って、無著との思想上の同一性によって、竜樹の偈は無著の偈と同様の資格で、瑜伽行派の聖教量として引用され、資料Dにおけるように、「中辺分別論」、「唯識三十頌」等と同義に又は同列に扱われることがある。
3. 竜樹は瑜伽行派の庇護者として、学派内に深く取り込まれているが、一方では、中観派の始祖として、ラトナーカラの中観派批判に於て大きな切り符となっている点も注意すべきである。

以上の結論として、ラトナーカラの思想的立場は、上述した A, B, C, D の資料に於て明らかな様に、あくまでも瑜伽行派にあり、中観派に対する対決姿勢は否定することができない。従って、彼をして、「中観と唯識とを統一した理論を展開した中観瑜伽派」とする説は、ラトナーカラと竜樹との共通する一面のみを捉え、ラトナーカラが竜樹を自らの側に取り込み、対峙する二派の中観派を「竜樹の門弟ではない。」として批判する中観、瑜伽行両派の対立する一面を看過したものと云わざるを得ない。

Abbreviations

D: Sde dge Edition. P: Peking Edition.

MAU: Madhyamakālamkāra-upadeśa of Ratnakarasanti D. No. 4085.

MAV: Madhyamakālamkāra-vṛtti of Ratnakarasanti P. No. 5573.

PPU: Prajñāpāramitā-upadeśa of Ratnakarasanti P. No. 5579.

SSB: Sūtra-samuccaya-bhāṣya of Ratnakarasanti D. No. 3935.

- 1) ラトナーカラの思想的立場について、通説として、次のような解説がなされている。
「経量瑜伽派に対立し、シャーンタラクシタの確立した中観瑜伽派を代表する学者にラトナーカラ・シャーンティがいる。彼は『般若波羅蜜多論』を著わし、仏教諸学派、とくに経量瑜伽派の理論を批判し、中観と唯識を統一した理論を展開した。」「大乘仏

- 典」(中央公論社) P-552. 「インド仏教関係年譜」。cf. 三枝充憲著「仏教小年表」(大蔵出版株式会社) P-11 参照。
- 2) ラトナーカラによって引用された竜樹の偈は「中論」1-1, XXIV-18 etc. 「六十頌如理論」第12, 19, 31, 34 偈 etc. 「宝行王正論」IV-96. その他に、ラトナーカラによって竜樹の偈とされているが、出典不明のものが数偈含まれる。
- 3) 解深密經 (大正 16-694bff.)
MAV (131b-6ff.) には、解深密經という經典名が示されている。
- 4) 出典不明。
- 5) ツォンカパの *Drañ ñes* によれば、この二偈の中、後の一偈のみが竜樹の「六十頌如理論」よりの引用であり、前の偈は「楞伽經」よりの引用とされている。従って、ラトナーカラが本文に於て、二偈とも竜樹の偈とするのは誤まりであって、シャーンタ・ラクシタが引用した二偈を、竜樹の偈と誤って伝えたものとされている。
Drañ ñes 553 (The Collected Work of Incomparable Lord Tsoñ kha pa vol. 14)
なお、MAV (119b-6ff.) 引用の、前半の偈は MAU. PPU 引用の偈とは異なり、*Drañ ñes* 引用のチベット文と同様に、「楞伽經」II-140 に非常に類似している。
- 6) 引用の「外の自らの色蘊は」より以下のチベット文は次の如くである。下線部は「竜樹の門弟ではない。」の部分である。
gañ shig phyi rol gyi rañ gi gzugs kyi phuñ po ḥdod pa dañ gshan phuñ po bshi
zad pañi mtshan ñid ḥkhul pa bzlog par ḥdod pa de dag ni klu sgrub kyi slob
ma ma yin te. śes pa yod pa la sogs pa dgag par brjod pañi phyir dañ. sa la
sogs pa sgro brtags par bstan pañi phyir ro. yañ gañ shig shon po la sogs pa
dañ. de śes pa ñid brdzun par ḥdra ba ñid dañ gnas par ḥdra bar smra ba de dag
kyañ. klu sgrub kyi slob ma ma yin no.
- 7) 第一派、第二派の中観派に対する批判について。
拙稿「ラトナーカラの無形相論者批判」(「印度学仏教学研究」32-1)。
拙稿「Madhyamakālamkāropadeśa の和訳解説」(「名城大学人文紀要」第33集)
P.-5 参照。
- 8) SSB (290b-3ff.) にも、同様の中観派批判が見られる。
- 9) 拙稿「Madhyamakālamkāropadeśa の和訳解説」(「名城大学人文紀要」第33集)
P.-14 注(13)参照。
- 10) cf. MAU (229b-6ff.).
- 11) SSB (288b-5ff.) の下線の「弥勒」は「世親」の誤まりであろう。

(名城大学教授)